

重点実施項目	基本活動の強みを生かして、ネットワークを広げよう！						
1 課題背景及び現状							
2020年から3年以上にわたり猛威をふるった新型コロナウイルス感染症の影響で、様々な活動の自粛や身体的な距離を保つことが求められ、人との交流が制限されました。このことから、一旦希薄になった人と人とのつながりを再構築するために、様々な団体や機関と手を取り合うことが改めて大切となります。							
2 活動の方針・目標							
○校区のネットワーク機能の充実 ふれあいネットワーク活動の強みを生かして、校区の課題の解決に向け、社会福祉施設の専門職やボランティアグループ等と連携しながら、それぞれの長所を生かした校区全体のネットワーク機能を充実します。							
○活動の充実や継続性を高めるためには、校区の5年後、10年後を担う人材の育成が必要です。認知症高齢者捜索模擬訓練や校区のふれあい行事等を通じ、様々な年代の住民が少しずつ福祉活動に参加できる環境づくりを継続します。							
3 段階的な取り組みの年次計画							
取り組み内容	連携する機関	2024	2025	2026	2027	2028	備考
ふれあいネットワーク活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町内会</li> <li>・まち協</li> <li>・民児協</li> <li>・老人クラブ</li> <li>・社会福祉施設</li> <li>・PTA</li> <li>・ボランティアグループ</li> <li>・市民センター</li> <li>・区社協</li> <li>・行政</li> </ul>	→					「見守り」「助け合い」「話し合い」
様々な住民活動との連携		→					住民や町内会等による
専門職やボランティアとの連携		→					専門性や特技を活かした活動への参画
訓練・福祉講座の開催		→					認知症高齢者捜索模擬訓練や避難訓練等社会福祉施設との連携
人づくり		→					行事や事業を活用

〒801-0882 大里南校区社会福祉協議会  
北九州市門司区原町別院 15番2号大里南公民館内  
TEL・FAX 093-381-4777

大里南校区社会福祉協議会



PETITVOSAURUS



Instagram はじめました

2024年度 2028年度





# 「住民発！」

## 大里南校区 小地域福祉活動第三次計画」

2024年度～2028年度



大里南校区社会福祉協議会では、2013年度に小地域福祉活動第一次計画、2018年度に第二次計画を策定し、住民みんなが安心して暮らせる支え合いのまちづくりを目指して取り組んできました。第一次・第二次計画の成果と課題を踏まえ、この第三次計画においても、関係機関や団体と連携し5つの基本目標と重点実施項目を中心に取り組み、地域共生社会の実現に向けて福祉のまちづくりを進めます。皆様のご協力をお願いいたします。

大里南校区社会福祉協議会 会長 中園 龍一

### 大里南校区の元気プラン

## 基本理念「目配り、気配り、思いやりの町、大里南校区」

◇計画体系（重点実施項目：特に力を入れて取り組む項目です）

基本目標 1	基本目標 2	基本目標 3	基本目標 4	基本目標 5
ふれあいの場を広げ 住民同士のつながりを深めよう！	世代間交流を深め 次世代の活動者を育成しよう！	健康づくりに取り組み 体力の維持につとめよう！	ボランティア活動を推進し 安全安心な地域にしよう！	情報提供活動を進め 福祉活動の理解の輪を広めよう！
<b>（重点実施項目）</b> <b>ふれあいネットワーク活動の充実</b> ○サロン活動 ○ふれあい昼食会 ○社協もちつき大会 ○敬老会	○納涼大会 ○レクリエーション大会 ○校区どんどこ焼き ○戸上神社まつり ○みなとまつり ○児童館まつり	○グラウンドゴルフ大会 ○健康づくり事業 ○健康ふれあい祭り ○あるこう会	○福祉講座、災害・搜索模擬訓練 ○交通安全運動 ○市いっせい美化運動 ○安全パトロールと 児童登下校時の見守り	○広報紙（センターだより） ○連絡調整会議 ○センターまつり

### 10年間の取り組み内容



カラオケサロン  
（第2、4木曜日  
13:00から開催中）



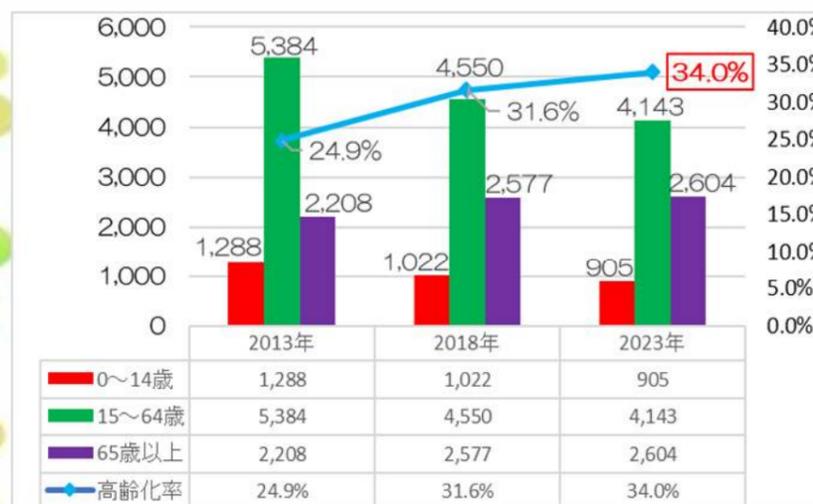
搜索模擬訓練  
（北九州大学の学生さんと  
一緒に取り組みました）



ふれあい昼食会  
（プチ体操を行いました）

### 校区の現状と福祉課題

【大里南校区の人口推移（住民基本台帳より）】



人口の減少と高齢化率が進んでいることから、支援を必要とする人が増加しています。また、福祉協力員等の地域活動の担い手の年齢も高くなり、次世代の発掘と育成にどのように取り組んでいくかが課題となります。